

キャンプにおける幼児・小学校低学年児童 の泣きに関する横断的研究

飯 田 稔 諸 澄 敏 之*

A Cross-Sectional Study of Crying in Young Children in Five-Day Resident Camp

Minoru IIDA and Toshiyuki MOROZUMI*

The purpose of this study was to investigate crying in young children who participated in five-day resident camp. The subjects were 265 kindergarten and elementary school children (158 boys and 107 girls) with an age ranged from five years, five months to nine years, three months. They engaged in such camp activities as making camp, campfire, nature study, mountain climbing, camp festival, cookout, etc. Data for this analysis were collected by the Camper's Behavior Check Sheet which was based upon participant observation by counselors over a period of five days in camp which operated two sessions each year in 1977 and 1978.

The following results were obtained:

- 1) Children investigated showed significant relationships between crying incidents and ages. The younger children were, the more they cried. Eight-year-olds rarely cried during camp period.
- 2) The highest rate of crying incidents was found at the second day of camp period, and then crying incidents tended to decline with day as whole age groups. For five- and six-year-olds, mountain climbing as a part of camp activities influenced an increase in crying incidents.
- 3) The main causes of crying incidents were homesickness, particularly for five- and six-year-olds, loss of property, and conflicts with camp peers.
- 4) The crying incidents caused by homesickness occurred mainly around dinner time.

Camp staff never had any serious trouble with crying in young children in camp. It seems to be one of the most important implications of the present study that young children can adjust to camp living more than parents expect. There is no evidence that young children are insufficient to cope with resident camp living. This study suggests that the age range of the participants in camp can be extended from upper elementary school and junior high school children to younger children.

キャンプは児童・青少年が親との家庭生活を離れ、自然環境の中で集団生活をすることを特徴としている。一般的に、キャンプの参加者対象は小学校低学年以下の年齢段階では、体力的・情緒的

に無理であるといわれている。本研究者らは、過去10年間、幼児・小学校低学年児童を対象に実験的キャンプを実施し、その成果を発表してきた⁴⁾⁵⁾⁶⁾。そしてキャンプに子どもを参加させる際

* 筑波大学大学院修士課程体育研究科 (Master's Program of Physical Education, The University of Tsukuba)

に、多くの親が種々の不安を感じるという結果を得た⁵⁾。こうした親の不安に応えるひとつの指標としてキャンプ中の子どもの泣き (crying) の実態を明らかにし、キャンプ指導上の一助とすることを目的とする。

不快の情緒には、恐れ、悲しみ、怒り、嫌悪などがあり、その表現のひとつとして泣きが見られる。乳児の初期の段階では、泣きは子どもの内的状態、特に眠い、暑い、痛い、空腹など生理的状态を表現していることが多い。しかし、子どもが成長するにつれて、恐いお面を見て泣くといったように外的刺激によって泣くようになる。幼児期に入ると、泣くことに対して社会的意義が加わって、転んだ時に誰もそばにいないと泣かないが、そばに誰かいると泣くという現象が見られる。この頃から泣くという表現に社会的抑制⁶⁾が加えられ、児童期に入るとそれがさらに強化され、泣くことがしだいに少なくなるのが泣きの発達傾向であると考えられている¹²⁾。

泣きに関する研究はあまり行なわれていない。Gesell¹⁾ は、0～10才児の子どもの泣きについて克明な観察にもとづいて、泣きとそれに関連する行動の年齢的变化を叙述した。Landreth⁹⁾ は、2～5才児の保育園・幼稚園と家庭の両場面における泣きに影響を及ぼす心理的、環境的要因を分析した。わが国では、守屋¹²⁾ が3～6才の幼児を対象に、保育園幼稚園と家庭における子どもの泣きの時間、原因、表現行動、抑制形式などについて研究した。乳児に対しては、高橋¹³⁾ が3～12ヶ月の子どもを被験児として、顔模型に対する泣きの反応について横断的研究を発表した。泣きに関連した用語として、ホームシック (home-sickness) があるが、Rose¹⁴⁾ McCan¹⁰⁾ の研究は、いずれも大学生を対象にしたものである。

キャンプにおける泣きに関連した文献の中では、Meyering¹¹⁾ が9～15才の子どもを対象に8週間のキャンプ期間中の行動の分析を行ない、問題行動のうち5.04%がホームシックによるものであり、低年齢にこの行動が多く見られることを発表している。飯田他⁸⁾ はキャンプにおける5才児の泣きについて、性差、兄弟関係との関連を報告し、さらに飯田⁷⁾ は143人の幼児・児童のキャン

プ中の泣きと学年別出現、日別出現、原因、ホームシックとの関連を報告している。

本研究ではキャンプにおける子どもの泣きの実態を明らかにするために、次の課題を検討する。

1. 泣きの出現と年齢的变化
2. 泣きの日別出現と年齢的变化
3. 泣きの原因と年齢的变化
4. ホームシックによる泣きの時間別出現

方 法

被験児 昭和52年・53年の8月下旬に実施した幼少年キャンプ研究会主催の4泊5日のキャンプ参加幼児・児童265名で、その年齢別内訳は、5才児93名 (男58. 女25)、6才児43名 (男30, 女13)、7才児81名 (男45, 女36)、8才児48名 (男25, 女23) である。5才児とは幼稚園年長5才児のことで、6・7・8才児とは、各々小学校1年生、2年生、3年生を指している。被験児は、東京及び東京周辺に居住し、キャンプ応募者のうち医師の健康診断によりキャンプ参加に支障がないと認められた者に限られた。被験児のうち、6才児37名 (86.0%)、7才児55名 (67.9%)、8才児31名 (64.6%) が幼少年キャンプ研究会主催のキャンプに以前参加した経験をもっている。

キャンプの概要 キャンプは群馬県吾妻郡嬭恋村、県立野外活動センターキャンプ場において、52・53年とも2回ずつ実施された。キャンプの目標は、参加者が1) 自立心を養う。2) 自然についての興味関心を育てる、3) 親しい仲間をつくることにあり、キャンプの形式は、テントで寝袋を使って宿泊する原始的キャンプ (primitive camp) であった。学年別にグルーピングが行なわれ、1グループ6～8名の子どもを1人のキャンプ・カウンセラーが指導した。カウンセラーは、野外運動を専攻し、キャンプの指導経験豊かな大学教員、大学院生、3年以上の大学生が選ばれ、経験者ほど年齢の低い子どもを担当した。キャンプ長、プログラム主任、看護婦、調理士、研究補助員などのスタッフを加えると、スタッフ対キャンパーの割合は、ほぼ1対3であった。次にキャンプの日程を表1に示す。

5才児は上記の日程に従ってキャンプ生活を送

TABLE 1 CAMP SCHEDULE

	Daily Routine	1st Day	2nd Day	3rd Day	4th Day	5th Day
5:30	Wake Up					
6:30	Flag Raising					
7:00	Break fast					
8:00	Morning Activity	Meeting Leaving Tokyo by Train	Arts and Craft	Mountain Climing	Nature Study	Leaving Camp Leaving for Tokyo by Train
10:30	Lunch					
12:30	Afternoon Activity	Arrival at Camp Making Camp	Hiking			Arrival at Tokyo Break-up
14:00	Flag Lowering					
15:00	Dinner					
16:00	Evening Meet	Camp fire	Group Activity	Camp Festival	Camp fire	
17:00	Bed Time					

ったが、6才児以上については、3日目と4日目の行動が昼間だけ入れ代った。天候に関しては、昭和52年は最終日を除いて全日程が雨で、昭和53年は全日程快晴だった。このキャンプでは、全行程9.2km、標高差450mの茨木山(1619m)登山がキャンプ活動の中で重視された。

調査方法 キャンプ参加幼児・児童の泣きを調べるために、カウンセラーによる参加者観察法(participant observation)がとられた。カウンセラーは1日24時間を通して、担当グループの活動と生活の指導にあたる中で、グループの誰が、何時に、何分間、どんな理由で泣いたかを「キャンパー行動記録用紙」にそのつど記録し、これを毎晩行なわれるスタッフ会議に提出した。ここでいう泣くとは、涙をこぼした時に泣いたと判断することにした。記録用紙に記入する際には、できるだけ子どもに気付かれないよう配慮した。カウンセラーの観察の不備を補足するために他のカウンセラーやスタッフの観察にもとづく意見聴取の作業がつけ加えられた。

なおキャンプ最終日の5日目の泣きについては、キャンプ日程表からもわかるように、早朝にキャンプ場を去っているためキャンプ生活時間が短いので、本研究のデータには含まれていない。

結果と考察

1. 泣きの出現と年齢的变化

キャンプ期間中最も多く泣いた回数を年齢別にみると、5才児13回、6才児7回、7才児6回、8才児3回で1回も泣かなかった子どもを除いた泣きの平均回数は、5才児3.3回、6才児2.0回、7才児1.8回で、年齢が高くなるほど泣きの回数が減少した。

また、子どもの泣いた時間は長いもので1時間、大部分は3～5分の間であり、年齢が低いほど泣きが長時間になる傾向が見られた。しかし、観察者によっては正確な時間測定がなされなかった可能性もありうるので、泣いた時間について詳細に述べることは避けたい。

子どもの泣いた回数の頻度と泣いた人数を年齢別に見たものが表2である。5才児ではキャンプ中3回以上泣いた子どもが35名(37.6%)、1～2回が30名(32.3%)、1回も泣かなかった子どもが28名(30.1%)とほぼ3分の1ずつに分散している。6才児では、3回以上が6名(14.0%)と5才児に比べて顕著な低下を示し、1回も泣かなかった子どもは10名(23.3%)で5才児よりも低下している。1～2回泣いた子どもが27名(62.7%)と全体の約3分の2を占めている。5才児と6才児の泣きの出現について χ^2 検定の結果は、両群間に1%水準で有意差が認められた($\chi^2=13.18$, $df=2$, $p<.01$)。7才児になると3回以上泣いた子どもの割合は6名(7.4%)とさらに低下し、1回も泣かなかった子どもが48名(59.3%)となり、泣いた子どもより多かった。6才児と7才児の両群間の泣きの差は、0.1%水準で有意であった($\chi^2=14.61$, $df=2$, $p<.001$)。8才児になるとキャンプ中の泣きは急激に減少し、5名(10.4%)が泣いたにすぎなかった。Yatesの修正式による χ^2 検定によれば、7才児と8才児の両群間の泣きにも0.1%水準の有意差が認められた。したがって泣きの出現と年齢との関連を横断的に見た場合、各年齢群ごとに差があり、年齢が高くなればなるほど子どもの泣きが減少するといえる。

TABLE 2
NUMBER OF CHILDREN CRIED FOR AGE GROUPS

Age Group	Frequency of Crying Incident			χ^2
	0 (%)	1~2 (%)	Over3 (%)	
5-year-olds	28 (30.1)	30 (32.3)	35 (37.6)	13.18**
6-year-olds	10 (23.3)	27 (62.7)	6 (14.0)	
7-year-olds	48 (59.3)	27 (33.3)	6 (7.4)	
8-year-olds	43 (89.6)	4 (8.3)	1 (2.1)	

p<.01 *p<.001

^a Yates Correction for 1 df was used

以上の結果に反して5才児と6才児の泣いた子どもの人数の割合をとりあげてみると、6才児の泣き(76.7%)が5才児(69.9%)より高いことが注目される。Gessell¹⁾も6才児の泣きの後退現象を指摘し、この「後もどり現象」は6才児が低い水準に落ち込んだためではなく、矛盾しているが、もっと高い水準に向うために一時的にそういう時期があるのだと説明している。6才児は泣きの発達におけるひとつの転換期と考えることができるのではなからうか。

2. 泣きの出現と年齢的变化

8才児をのぞく子どもたちのキャンプ中の泣きを初日から4日目まで日別に分類したものが図1と表3である。8才児については、2日目2名、3日目2名、4日目1名の泣きがあったが、日別出現が極端に少ないため統計処理は省いた。

5~7才児の泣きを全体的にみると、キャンプ初日に43名(19.8%)が泣いているが、2日目になると泣きの割合は上昇し84名(38.9%)とほぼ2倍になった。初日と2日目の泣きには0.1%水準で有意差が認められた($\chi^2=21.56$, $df=2$, $p<.001$)。2日目と3日目、3日目と4日目の両日間には、いずれも泣きの低下現象が見られたが有意差は得られなかった。したがって、5~7才児のキャンプでは、キャンプ初日より2日目に泣きが多く見られ、3日目からは泣きが減少する傾向があるといえよう。

次に表4・5・6に示すように、泣きの日別出現の推移を年齢ごとにみると、5才児では初日から2日目に泣いた人数が26名(28.0%)から41

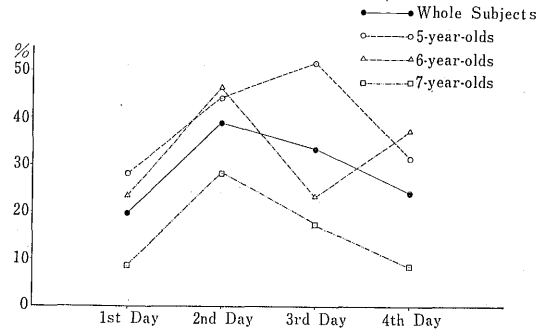


Figure 1. Percentage of Crying Incidents of Age Groups for Days of Camp period

TABLE 3
NUMBER OF SUBJECTS CRIED FOR DAYS OF PERIOD

Day	Frequency of Crying Incident			χ^2
	0 (%)	1 (%)	Over2 (%)	
1st Day	67 (72.0)	21 (22.6)	5 (5.4)	8.00*
2nd Day	52 (55.9)	25 (26.9)	16 (17.2)	3.06
3rd Day	45 (48.4)	36 (38.7)	12 (12.9)	8.02*
4th Day	64 (68.8)	22 (23.7)	7 (7.5)	

*p<.05

名(44.1%)に増加し、5%水準で有意差が認められた。 $(\chi^2=8.00, df=2, p<.05)$ 。2日目から3日目にかけての泣きの増加に有意差は見られなかった。また、3日目から4日目にかけては、泣いた人数は48名(51.6%)から29名(31.2%)に逆に減少し5%水準で有意差が見られた($\chi^2=8.02, df=2, p<.05$)。したがって、5才児では初日から2日目にかけて泣きが多くなるが、3日目から4日目にかけて泣きは少なくなった。

6才児では泣いた人数が初日から2日目にかけて10名(23.2%)から20名(46.5%)に増加し、5%水準の有意差を示した($\chi^2=41.4, df=1, p<.05$)。また2日目から3日目にかけては、20名(46.5%)から10名(23.2%)に減少し、5%水準で有意差が認められた($\chi^2=4.14, df=1, p<.05$)。したがって、6才児では初日から2日目にかけては泣きが多くなるが、2日目から3日目にかけては逆に泣きが少なくなることがわかる。

7才児では、初日の7名(8.6%)から2日目の23名(28.4%)と泣きが増加し1%水準で有意差があった。したがって、7才児では初日から2日目にかけて泣きが多くなる。

TABLE 4
NUMBER OF 5-YEAR-OLDS CRIED FOR DAYS OF CAMP PERIOD

Day	Frequency of Crying Incident			χ^2
	0 (%)	1 (%)	Over2 2 (%)	
1st Day	174(80.2)	36(16.6)	7(3.2)	21.56***
2nd Day	133(61.3)	58(26.7)	26(12.0)	3.48
3rd Day	145(66.8)	57(26.3)	15(6.9)	4.76
4th Day	165(76.1)	43(19.8)	9(4.1)	

***p<.001

TABLE 5
NUMBER OF 6-YEAR-OLDS CRIED FOR DAYS OF OF CAMP PERIOD

Day	Frequency of Crying Incident			χ^2
	0 (%)	1 (%)	Over2 2 (%)	
1st Day	33(76.7)	9(20.9)	1(2.3)	a4.14*
2nd Day	23(53.5)	15(44.9)	5(11.6)	a4.14*
3rd Day	33(76.7)	10(23.3)	0(0.0)	
4th Day	27(62.8)	14(32.6)	2(4.7)	a1.38

*p<.05

a Yates Correction for 1 df was used

TABLE 6
NUMBER OF 7-YEAR-OLDS CRIED FOR DAYS OF OF CAMP PERIOD

Day	Frequency of Crying Incident			χ^2
	0 (%)	1 (%)	Over2 2 (%)	
1st Day	74(91.4)	6(7.4)	1(1.2)	a9.20**
2nd Day	58(71.6)	18(22.2)	5(6.2)	a2.24
3rd Day	67(82.7)	11(13.6)	3(3.7)	
4th Day	74(91.4)	7(8.6)	0(0.0)	a1.98

** p<.01

a Yates Correction for 1 df was used

泣きの日別出現を年齢ごとに見ると、5才・6才・7才児すべての年齢段階で初日から2日目に

かけて泣きが多くなり、2日目から3日目にかけては6才児で、3日目から4日目にかけては5才児で、いずれも泣きが少なくなった。

いずれの年齢段階でも、2日目に泣きの増加現象がみられるのは、子どものキャンプ生活への不適応と関連があると思われる。初日は、テント設営、夕食準備、歓迎キャンプファイヤー、就寝の仕度と時間に追われ、子どもにとって考える余裕がない。またカウンセラーも、キャンプ初日をスムーズに運営するために子どもの世話を何から何まで自分でやってしまう傾向がある。しかし、2日目になると、子どもは「自分のことは自分でやる」という自立的行動を求められ、問題解決の努力と葛藤を要求される。そこで子どもは不適応を起こし、泣きが増加するものと考えられる。

2日目から3日目にかけて5才児では泣きの増加、6才児では泣きの減少、7才児では泣きの減少傾向が見られたが、6才児で2日目より3日目の方が泣かなくなったのは、この頃からキャンプ生活に対する適応が出来てきたためと考えられる。一方、5才児の泣きが増加傾向にあるのは3日目が登山の日なので、登山の苦しさ、それに伴うホームシックが影響しているものと思われる。

3日目から4日目になると、5才児の泣きは減少し逆に6才児では泣きは増加する傾向が見られた。7才児では泣きの減少がひき続き現われた。4日目になってはじめて5才児はキャンプ生活に馴れ、泣きが減少する。6才児の泣きの増加は茨木山登山のためと考えられるが、7才児にとっては、茨木山登山も5・6才児ほど苦にならず、余裕をもって活動していたことが泣きの減少から察せられる。

日別泣きの出現と年齢的变化では、全体的に見て、2日目がキャンプ生活中最も不適応を起こす時で、子どもの泣きが多いが、3日目以後の泣きについては、特に5・6才児ではキャンプ活動としての登山の影響を考慮する必要がある。

3. 泣きの原因と年齢的变化

「キャンパー行動記録用紙」の中に記録された子どもの泣きの原因をその内容に照らして次の7つの下位項目に分類した。

1) ホームシック……「お母さんに会いたい」「お家へ帰りたい」など家族や家庭のことを恋しがる。

2) 持物の紛失……食器セット（はし、フォーク皿など）、懐中電灯、衣服、シューズ、軍手、歯ブラシなどを紛失したり、自分で発見できない。

3) けんか……キャンパーどうしの口論、身体的攻撃。

4) 事故……疾走中の転倒、川への転落、キャンパーどうしの衝突、ナイフなどによる事故。

5) 活動の不満……キャンプ・ファイヤーのスタンプ（創作劇）の役割や登山の苦しさにに対する不満。

6) 身体的不調……悪寒、腹痛、歯痛、乗物酔いなど。

7) その他……上記以外の内容のもので、原因不明、カウンセラーにしかられた、迷子、夢を見るなど。

子どもがキャンプで泣く原因について図2で見ると、ホームシックで泣いた件数は139件で全体の39.9%で最も高く、以下持物の紛失52件（14.9%）、けんか50件（14.4%）、事故26件（7.5%）、活動の不満26件（7.5%）、身体的不調21件（6.0%）、その他34件（9.8%）の順位になっている。したがって、5才児から7才児がキャンプ中に泣く最大の原因はホームシックによるものである。これは、5才児から7才児の発達段階では、両親特に母親への情緒的依存が高いため、依存の対象を失わないホームシックにかかるためであろう。

泣きの原因について、年齢別にみると図3に示すように、「ホームシック」と「活動の不満」の2つの下位項目についてのみ有意な差が認められ

た。ホームシックに関しては、5才児と6才児の間に有意差は認められなかった。6才児と7才児の両群間には、6才児のホームシックによる泣きが15人（34.9%）で、7才児では14人（17.3%）であり5%水準で有意な差があった（ $\chi^2=3.92$, $df=1$, $p<.05$ ）。したがって5才児と6才児の間にホームシックによる泣きの差はないが、6才児の方が7才児よりホームシックが原因で泣く子どもが多い。

5才児と6才児の両群間にホームシックによる泣きの差がみられなかったのは、前に述べたGesell¹⁾の「後もどり現象」に一致するものであろう。7才児では、ホームシックが原因で泣くことが少なくなる。これは、7才児になって依存の対象がそれ迄の家庭、特に母親依存から、友だち、教師他の成人にまで拡大され、その結果として情緒的に自立してゆくためと考えられる。

活動の不満では、6才児と7才児を一群にして考えると、5才児では19人（20.4%）、6・7才児では7人（5.6%）で、1%水準で有意差が見られた） $\chi^2=9.67$, $df=1$, $p<.01$ ）。5才児は、6・7才児よりも活動の不満が原因で泣くことが多いといえよう。6・7才児では5才児に比較して活動の不満に対して泣いて訴えるよりも、他の表現方法をとるようになること、他人と協力してうまくやってゆく処世術を身につけるためと思われる。

その他に、持物の紛失による泣きでは、年齢が低くなるほど多い傾向があり、反対に、けんかによる泣きでは、年齢が高くなるほど多い傾向があったが、いずれも有意な差は見られなかった。

4. ホームシックによる泣きの時間別出現ホ

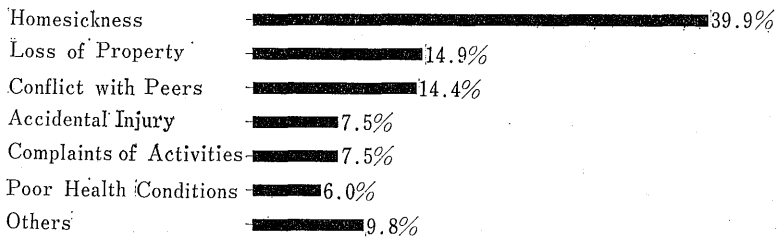


Figure 2. Percentage of Immediate Causes of Crying

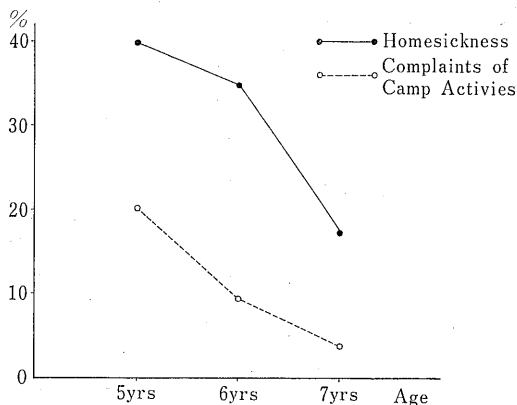


Figure 3. Percentage of Crying Incidents Being Caused by Homesickness and Complaints of Camp Activities for Age Groups

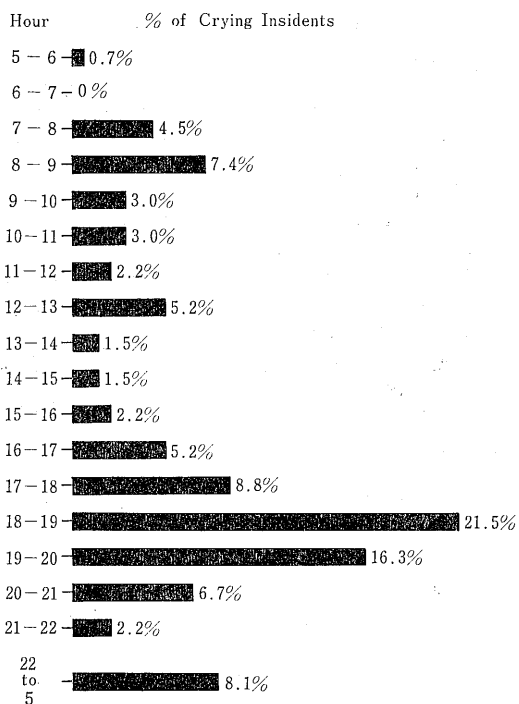


Figure 4. Percentage of Crying Incidents Being Caused by Homesickness for Hours of Camp Period

ームシックによる泣きの時間別出現を図で見ると、18—19時に29件（21.5%）で最も高く、続いて、19—20時22件（16.3%）、17—18時12件（8.8%）になっている。17～20時までの時間帯に、46.6%と全体の泣きのほぼ半分が出現している。キャ

ンプ生活では、この時間帯は調度夕食の準備から後かたづけまでの時間に相当する。

3～6才児を対照にした守屋¹²⁾の研究によれば、家庭では夕食前後に泣くことが多く、また Landreth⁹⁾の研究でも、2～5才児では17～18時、18—10時に各々11%と最も多く、16～20時に泣きの40%が出現している。したがって、夕食前後の時間帯に泣きが多く見られるのは家庭生活にも共通しているが、キャンプ生活においてもこの時間帯にホームシックによる泣きの出現が多いのは、一日の活動の疲労の蓄積とキャンプの簡素な食事の雰囲気家族を想い出させることの2つの要因が重なることによるものと考えられる。

ホームシックによる泣きの時間的出現と年齢的变化については、すべての年齢段階で夕食前後に泣きが上昇するという同じような傾向を示し、差はなかった。

以上の分析に加えて、泣きと性差、天候、以前のキャンプ経験の3つの関連についても検討を加えた。幼児を対象にした飯田他⁴⁾の研究では、キャンプ中、女子の方が男子より泣きが多かったが、今回の結果では差はみられなかった。また、雨のキャンプの方が泣きが多いのではないかと考え、雨続きの昭和52年と晴天続きの昭和53年のキャンプを比較してみたが、ここでも差はなかった。キャンプでの雨は、親やキャンプ指導者が考えるほど子どもにとっていやなものではないのかもしれない。事実、子どもたちはキャンプ場のぬかるみを見つけては、雨の中のドロコ遊びを楽しんでいた。さらに、以前のキャンプ経験にも泣きの差はみられなかった。Rose¹⁴⁾の研究では、女子の大学新生はキャンプ経験のある学生の方がホームシックにより多くかかるという一般的に考えられている仮説とは逆の傾向があることを示唆している。

結 論

キャンプ場面における5～8才児の泣きの実態を明らかにするために、4泊5日のキャンプに参加した5～8才児265名を対象に、カウンセラーの参加者観察法による「キャンパー行動記録用紙」が用いられた。結果は次の通りである。

- 1) 年齢により泣きの出現に差がみられ、年齢が低いほどキャンプで泣くことが多い。8才児では、キャンプで泣くことはほとんどない。
- 2) 全体的にみると、キャンプ2日目に泣きが最も多く出現し、それ以後低下する傾向がある。5・6才児では、キャンプ活動としての登山が泣きの出現に影響する。
- 3) ホームシックが主な泣きの原因としてあげられ、特に5・6才児にこの傾向が強い。
- 4) ホームシックによる泣きは夕食前後にかけて最も多くみられる。

キャンプ期間中の子どもの泣きは、カウンセラーを手こずらせたり、プログラム運営上支障をきたすようなものはなかった。本研究の結果は、幼児・小学校低学年児童は親が想像しているよりも、キャンプ生活に対する高い適応力をもっていることを示唆しており、親の不安は子どもの適応能力に対する過小評価に起因しているといえるのではないだろうか。事実、キャンプ前の母親のキャンプに対する不安は、キャンプ後減少することが報告されている⁵⁾。

今後の課題として、泣きの質的量的両面からの測定法の開発、泣きの縦断的研究、キャンプ・家庭・学校における泣きの関連、泣きと兄弟関係及び親の養育態度との関連、キャンプに対する不安とキャンプの泣きの関連などが明らかにされる必要がある。

参考文献

- 1) Gesell, Arnold, **The Child from Five to Ten**, pp. 355~375, Harper & Row, 1946.
- 2) 波多野完治, 依田新(編), **児童心理学ハンドブック**, pp. 303-304, 金子書房, 1975.
- 3) 飯田稔他, **幼児キャンプの管理に関する研究**, 日本体育学会第21回大会発表論文, 1970.
- 4) Iida, Minoru, **Independence of Japanese Kindergarten Children Associated with Five-Day Resident Camp**, Unpublished Doctoral Dissertation at the Pennsylvania State University, 1976.
- 5) 飯田稔他, **幼児キャンプ参加者の母親の不安に関する研究**, 日本体育学会第29回発表論文, 1977.
- 6) Iida, Minoru, **Effects of Camping Experience upon Independence of Kindergarten Children**, 筑波大学体育科学系紀要, 1; 55-64, 1978.
- 7) 飯田稔, **キャンプにおける泣きの研究**, 日本レクリエーション学会第8回大会発表論文, 1978.
- 8) 桂広介他, **児童心理学講座6**, pp. 34-36, 金子書房, 1973.
- 9) Landreth, Catherine, "Factors Associated with Crying in Young Children in the Nursery school and the Home" **Child Development**, 12: 81-97, 1941.
- 10) McCann, Willis, "Nostalgia: A Descriptive and Comparative Study" **Journal of Genetic Psychology**, 62: 97-104, 1943.
- 11) Meyering, Harry, Behavior Problems Encountered in a Camping Situation, **Journal of Mental Hygiene** 21: 623-629, 1937.
- 12) 守屋光雄, **児童心理学研究**, pp.177-193, 京都邦書館, 1945.
- 13) 諸澄敏之, **幼児キャンプ参加者の社会性の発達と母親の養育態度**, 日本レクリエーション学会第8回大会発表論文, 1978.
- 14) Rose, Annelies, "A study of Homesickness in College Freshmen," **Journal of Social Psychology**, 26: 185-202, 1947.
- 15) 高橋道子, **顔模型に対する乳児の微笑反応, 注視反応, 身体的接近反応, 泣きについての横断的研究**, **心理学研究**, 44-2; 124-123, 1973.